

文學團體の創出と嶺南現代文學の成立

——文學研究會廣州分會の位相——

裴 亮

一、「嶺南現代文學の發端」の問題

一九八〇年代後半より中國現代文學研究界では、夏志清の『中國現代小説史』（一九六一年）をはじめとする海外中國學の影響を受け、舊來の革命文學史論の「政治的」枠組みへの問い直しを企圖した「重寫文學史」（文學史の書き換え）が唱えられ始めた。北京で黃子平・陳平原・錢理群の三氏が打ち出した「二十世紀中國文學」の概念や、上海で王曉明が主導した「重寫文學史論争」がその代表的な動向である。彼らもたらした文學史研究上の一連の動きを一言でいえば、様々な新しい視點から中國近現代文學史を見直そうとする思潮である。それに伴い、特定の地域で行われた文學活動を研究對象とし、各地域の文學の獨自性、地域性と中國近現代文學發展史との關連性を見出そうとする地域専門文學史の研究も盛んになった。^③ こうした背景の中、それまであまり重視されて來なかつた嶺南地域も、その代表的な地區の一つとして新たに脚光を浴びた。

一九八九年に出版され、嶺南地域の現代文學の發展史に最初に注目した『嶺南現代文學史』は、「重寫文學史」の文脈の中で生まれたと

考えられる。著者の張振金氏は、嶺南現代文學の源流と變遷を、「萌芽期」「成長期」「發展期」という三つの段階に區切つて本格的に論述した。「引言」の冒頭で氏は次のように述べている。

在中國現代文學研究方面、雖然已有許多重要的成果、但仍有許多尙待開拓的領域、嶺南現代文學就是其中之一。（中略—引用者、以下同じ）可惜許多重要的作家和作品、在解放後出版的十幾部『中國現代文學史』里、都很難找到自己位置。【中國現代文學研究の領域がまだたくさんある。嶺南現代文學はその中の一つである。（中略）残念ながら數多くの重要な作家と作品は、解放後に出版された十數部の『中國現代文學史』において、自己の位置がなかなか見つけにくい。】（譯文は、特に斷りがない場合は拙譯による、以下同じ。）

引用文の「嶺南」とは、中國の南部の「五嶺」の山脉よりも南の地方を意味するが、張氏によれば「主として現在の廣東を指す」。嶺南地域は中國の他の地域とは五嶺で隔絶され、氣候や環境も大きな差異を有する。海に面しており、中原の政治的混亂の及びにくい土地柄から、

獨特の「嶺南文化」が廣東などで育まれた。張振金氏は、嶺南現代文學が中國現代文學の一部分でありながら、獨特な地域性を有すると位置づける一方、建國以來の文學史上では重視されず、未開拓の研究領域であると提示している。嶺南現代文學の發端と發展に礎石を築いたのは、一九二三年七月七日、嶺南大學文科の副教授陳受頤、助教湯澄波と甘乃光、そして在學中の梁宗岱、劉燧元、潘啓芳、陳榮捷、陳受榮、司徒寬が文學研究會の組織擴大の方針に應じて結成した廣州分會である。嶺南新文學の第一聲を放ったこの文學團體について、張振金氏は次のように評價している。

直到一九二三年七月，才在廣州出現了第一個文學團體——廣州文學研究會。（中略）它舉起寫實主義的文學旗幟，與鴛鴦蝴蝶派的舊文學孤軍奮戰，并培養了廣東新文學的第一代作家，它的功績是不可低估的。【一九二三年七月になって、やっと廣州において最初の文學團體——廣州文學研究會が出現した。（中略）廣州文學研究會は寫實主義文學の旗印を掲げ、鴛鴦蝴蝶派の古い文學と孤軍奮闘し、そして廣東新文學の初代作家を育成し、その功績は過小評價されてはならないものである。】

從來、嶺南大學で發足した文學研究會廣州分會について、その存在と功績が事實として認められる一方、その詳細な活動は知られず、忘れられたようである。中國現代文學史ではあまり注意を払らなかつた。こうした狀況が生じた背景には、關連史料の缺乏のほか、文學史研究が北京・上海など中心都市を偏重していたことが大いに關係し、文學史における重要性が十分に理解されていなかったことがある。しかし、廣州には特有の風土と生活様式、方言と民俗文化があり、華北・華東文化圏と同じく、豊かで獨特な嶺南文化圏が形成されて來た。特

に近代に至つて、當時中國の思想革命及び社會革命運動が廣州に源を發したことに伴い、廣州も新文學運動において一つの中心地として重要な位置を占めるようになった。従つて、嶺南地域の新文學の發生と成立を究明することによつて、華北・華東・華南の現代文學の發展過程を空間的に呈示することができる。また、そこで結成された廣州分會に關する研究は、文學研究會の全貌を浮き彫りにするためにも不可欠なアプローチであるに違いない。

筆者はこれまで廣州分會について資料調査を行い、この分會が創刊した機關誌『文學』を新たに發見することができた。前稿の「文學研究會『廣州分會』の實像——機關誌『文學』の發見をめぐつて」⁽⁶⁾において、廣州分會の會員構成を考證し、機關誌『文學』の様式と細目を紹介し、廣州分會と北京本部及び上海分會との連動關係について基礎的な問題を論じた。しかし、現代文學史に埋もれたこの文學研究會廣州分會は、一體どういう経緯で結成されることになったのか。また、その文學活動はどんな特色を持ち、嶺南現代文學の成立とどういふ關係を有するのか。紙幅の關係で、前稿ではこういった問題点を究明する域には達していない。このような狀況を踏まえ、本稿は文學研究會廣州分會の機關誌『文學』に加えて、嶺南大學の刊行物『嶺南青年』（一九一七年創刊、一九二二年に『南大青年』と改名）、『南風』（一九二〇年四月創刊）を手掛かりとして、嶺南地域における最初の新文學團體である文學研究會廣州分會の創作實績を整理することにより、廣州分會の輪郭を追究し、その全體像を浮き彫りにするものである。また、具體的な作品の紹介と分析によつて、文學研究會廣州分會の文學活動の性格及び嶺南現代文學史における位置を明らかにしたい。

二、文學團體としての軌跡——大學から全國へ

嶺南大學の源流は、一八八八年にアメリカ人の資本によって創設された「格致書院」に遡る。後に「五嶺山脈の南」という意味で、「嶺南」と名づけられた。一九二〇年代半ばまでの沿革と實際の規模に關しては、『嶺南大學文獻目錄——廣州嶺南大學歷史檔案資料』によれば次の通りである。一九一六年に文理科大學を開設、一九一八年に第一回の卒業と學位授與式を舉行、それによって大學部が初めて完成。一九二一年、學内の農學部を農科大學に擴大。一九一八年に學内で華僑學校を設立準備。先に華僑學生特別班を設け、一九二一年に華僑學校が完全に成立。二〇年代、文理科大學が相次いで文學、自然科學、商務、化學、教育の五學部を設置。つまり、一九二〇年代の初頭、嶺南大學はすでに施設と學科の設置が完備され、教育環境も整えられ、中國南方において名立たる大學になっていたのである。このような教育環境で産まれた文學研究會廣州分會の全體像を究明するには、まずその起源、發足、そして發展の足跡を辿っておく必要がある。

(一) 胎動期の實驗（『南風』の創刊號から特刊『西洋詩號』まで）

清末民初の轉換期において、「近代文學への道程としてより重要なことは」、「外國との接觸が深まるにつれて開港地の都市を中心に、近代ジャーナリズムの成立が認められること」である。十九世紀の初年から、幾つかの外國語の新聞や雑誌も廣州で刊行されるようになった。廣東は民國以前から政論新聞の發行が盛んで、南方における言論界の重要な據點であったため、五・四新文化運動の洗禮を受け、一九二〇年代に至って、新文化を宣傳する雑誌が集中的に現れた。例

えば、學生運動に注目する『新學生』（一九二〇年二月創刊）、政治と經濟を重視する『廣東群報』（一九二〇年十月創刊）等がある。しかし、多くのものは總合的であるものの、やはり政治や經濟の領域に偏っている。ほぼ同時に誕生した刊行物の中で、『南風』という雑誌だけは、新文學の試作を比較的多く掲載したと張振金氏が指摘している。『南風』とは、嶺南大學學生が言論を發表し、學術研究の交流を行う場として、大學學生會が一九二〇年四月に創刊した大學の學術誌の一種である。従来、この雑誌の持つ文學性はあまり注目されて來なかつた。しかし、『南風』は文學研究會廣州分會の會員たちと密接な關係があつた。

『南風』の創刊において大きな力を振つたのは、後の文學研究會廣州分會の發起人ともなつた陳受頤、陳榮捷、甘乃光の三人である。陳受頤は、一九一八年嶺南大學の文學士の學位を取得した後、嶺南大學で教鞭を執つた。甘乃光は、廣東省岑溪出身で、嶺南大學在學中、主に中國經濟思想を専攻した。一九二二年文學士の學位を取得し、嶺南大學の助教となる。『南風』が創刊された時、甘乃光は嶺南大學の大學學生會の會員として活躍しており、更に一年後の一九二一年十月に行われた大學學生會の選舉で會長に選ばれた。こうして、教師である陳受頤と經濟や文學に興味を持つ學生の甘乃光、陳榮捷を主力として、『南風』が誕生する。當時、中國において他の大學では全く實施されていなかった男女共學が、嶺南大學では一九一七年よりすでに實現していた。一九二〇年に創刊された『南風』にも、彼らは學内で行われた男女共學などの社會問題に興味を抱いて文章を寄せた。第一巻の第一號から第四號までの三人の作品を次の頁で一覽表にまとめてみよう。

表一・一九二〇年『南風』における陳受頤、陳榮捷、甘乃光の文章

第一卷一號 (一九二〇・四)	第一卷三號 (一九二〇・十)
<ul style="list-style-type: none"> ・歐戰後宗教的覺悟 ・尼采問題的起源和解決 ・我們爲什麼要實行男女共同教育的運動 ・某伯爵和賀婚的人 (小説) 美國 O. Henry ・隨感錄 (三) 修身教科書 ・討論和介紹幾種經濟思想史的書籍 (四) 名譽會長 	<ul style="list-style-type: none"> ・近代英文文學的背景 ・愛爾蘭劇場運動 ・社會問題概論 ・尼采之問題的起源和解決
<ul style="list-style-type: none"> 陳受頤 陳榮捷 甘乃光 陳榮捷 	<ul style="list-style-type: none"> 陳受頤 陳榮捷 甘乃光 陳榮捷
<ul style="list-style-type: none"> ・文學評論發端 ・宗教解放 ・嶺南大學男女同學之歷程 	<ul style="list-style-type: none"> ・『西洋詩號』(特刊) ・美國新詩述略 ・詩翁雪利的研究 ・白浪寧研究 ・詩之眞功用
<ul style="list-style-type: none"> 第一卷二號 (一九二〇・五) 	<ul style="list-style-type: none"> 第一卷四號 (一九二〇・十二)

圍み線の部分は、文學と關連のある文章であるが、その分量が多くないことは一目瞭然である。特に注目したいのは、唯一の文學作品として創刊號に掲載されたオー・ヘンリー小説の翻譯である。甘乃光は白話體でオー・ヘンリーの小説「某伯爵和賀婚的人」を漢譯し、また本文の前に譯者の前書きも付している。この譯者付記で、彼が短篇の名手と呼ばれるオー・ヘンリーの文學にたずさわつた経緯や代表作を紹介し、またオー・ヘンリーの獨特な色彩を、ドラマチックな展開、通俗化した言葉、市民の哀歡の描寫と指摘している。¹²⁾ 樽本照雄氏の『新編増補清末民初小説目錄』によれば、中國におけるオー・ヘンリー作品の翻譯は『小説月報』の初代編集長だつた俾鐵樵が譯した『麵麴趣

談』を嚆矢とする。¹³⁾ この翻譯は一九一四年六月に『小説月報』の第五卷第三號に掲載され、一九一九年までで唯一のオー・ヘンリー作品の漢譯である。しかし、これは文言文で譯されたものであり、小説の翻譯だけに止まつており、原作者については一切觸れていない。時代が下り、一九二五年に至つてオー・ヘンリー作品の翻譯が集中的に文學研究會の機關誌等に掲載された。¹⁴⁾ このような事實を踏まえると、甘乃光の手になる譯者前書きは、近代中國において最初のオー・ヘンリーに關する詳細な紹介であり、また、「某伯爵和賀婚的人」は初めて白話文で譯されたオー・ヘンリー小説であると考えられる。小説の翻譯以外では、陳受頤は近代英文文學の背景を分析し、陳榮捷はアイルランドで行われた劇場運動の紹介を試みた。このような實驗を経て、第一卷第四號(一九二〇年十二月)に至り、彼らは『西洋詩號』の特集を組み、アメリカ新詩や、シェリーとブラウニング夫婦等の詩人に關する研究を掲載し、本格的に文學の道への一歩を踏み出したのである。

(2) 準備期の定礎(『西洋詩號』刊行から廣州分會結成まで)

文學特集『西洋詩號』を刊行した翌年、『南風』は元の編集理念に立ち返り、二月に第二卷第一號と四月に第二號を刊行した。その際、執筆者に甘乃光のほか、後に廣州分會の會員となる湯澄波、司徒寬の二人を加えた。この二冊に三人が發表した文章は僅か四篇しかなかっただけでなく、もつぱら社會科學に傾いていた。その後、大學學生會に經濟問題が生じ、『南風』の資金源は枯渇する。この苦況を改善することができず、『南風』は二年餘りに亘つて休刊を餘儀なくされた。しかし、一九二三年六月に至ると、當時すでに嶺南大學文科の副教授に就任していた陳受頤が『南風』の編集長を擔當することになり、『南

『風』の編集理念を一新、改版に着手し、第二卷第三號を刊行した。陳受頤は「本誌種種啓事」において、

我們近來文藝的傾向雖多，却一時不能改爲純文學的雜誌。我們至今以後，除了特號以外，每月底內容，總以文學的著述做中心。

【本誌は近年文藝の傾向が多いが、しかしすぐに純文學の雜誌に變えることはできない。本誌は今後、特別號以外は、每號の内容は、全て文學的著述を中心とする。】

と述べ、純文學雜誌ではなかった『南風』を文藝中心の編集に改める旨を表明した。このような趣旨に従つて編集された第二卷第三號の特徵は、以下のように概括できると考える。

(I) 文學研究會廣州分會が結成される直前に刊行。

(II) 新詩を中心に掲載、寫實主義を提唱、文藝性を追求。

(III) 廣州分會を立ち上げた九人の會員の内、八人が寄稿。

この(I)の刊行時期——一九二三年六月——は特別な意味を持つていられると思われる。なぜならば、廣州分會がその一か月後の七月七日に結成されたからである。文學に熱心な學生たちは、『南風』の改版と編集をめぐる交流と論議をきっかけに、文學團體を結成する考えを打ち出したと推測される。第二卷第三號は現代新詩を中心テーマにしており、新詩九四首、ドイツの現代詩の翻譯一篇を掲載している。『西洋詩號』と比べると、新たに出發したこの第二卷第三號は、西洋詩の紹介から新詩の創作を中心とする方向へ進化している。

では次に、この第三號の「編集者言」に現れた明確な寫實主義の主張について検討を加える。主編である陳受頤は、「廣東底文壇和寫實的小説」において、當時の廣東文壇を次のようにかえりみる。

近年來廣東底文壇，可以說是消沈萬狀了。(中略)把流行的小説，

稍一審查，便可以知道銷售最廣，種類最多的，通是最無聊，最卑鄙，最容易陷意志薄弱的人於汚濁的故事。(中略)而市儈性的書商，還說是「頂好的寫實小説」，故意強用新名詞，來達到他們漁利底唯一目的。【近年廣東の文壇は、非常に消沈していると言えよう。(中略)流行小説について少しく考えてみれば、販路が最も廣く、種類が最も多いものは、常に最も無聊で、最も卑劣な、最も意志の弱い人を汚濁へと陥らせる物語だとわかる。(中略)しかし、市井の憎むべき書商はまたこれを「最もよい寫實小説」と言い、わざと新名詞を無理やりに使い、彼らの不當な利益をせしめるといふ唯一の目的を實現させる。】

日清戰爭後、頹廢の色を深めていた廣州文壇は、新文化運動後もしばらくは變わらなかつた。讀者の興味に媚びる商業主義一邊倒の「鴛鴦蝴蝶派」や、「寫實主義」の名をかたる「偽の寫實」戀愛小説などが、廣州文學界にはびこつていた。陳受頤はそれらの流行文學を批判し、自ら考へた寫實主義について、

寫實主義，本來對於人類的卑鄙行爲，罪惡生活，汚邪思想，都不肯逃避，而求面對面的表現和批評的。(中略)我們對於一切の丑惡，本該還他的丑惡，這是寫實主義最中正的態度。【寫實主義は、そもそも人類の卑劣な行爲、罪惡に満ちた生活、邪な思想に對して、すべて逃げようとせず、面と向かつて表現し、批評することが求められる。(中略)私達はすべての醜惡に對して、本來その醜惡を還元すべきである。これは寫實主義の最も中正な態度である。】

と指摘し、人生の汚點や缺點や罪惡などを隠さず忠實に反映する寫實の眞義を主張した。このような寫實主義の提唱は、『西洋詩號』の時期からもうすでに始まつていた。例えば、陳榮捷は「詩之眞功用」に

において、「文學之責任是表現人生和批評人生。詩是文學之一，當然服從這個定律（文學の責任は人生を表現し批評することにある。詩は文學の一種であるから、勿論この規律にも從^①）」と論じ、「人生のため」の詩歌觀を提示している。文學批評だけでなく、この時期には寫實主義に關する理論の翻譯も精力的に行われた。第二卷第三號と第四號に續けて連載された湯澄波の「唯實主義」はその最たる例である。湯澄波は先に Bliss Perry の『小説的研究』という論著を翻譯し、その中から第九章の「唯實主義」だけを抽出して『南風』に寄稿した。この『小説的研究』の翻譯は後に文學研究會の『漢譯世界名著叢書』にも收録され、一九二五年に正式の出版に至った。

さらに、(III) 執筆者の構成についてみると、梁宗岱、潘啓芳、陳受榮の三人の執筆者が新しく加わったことがわかる。梁宗岱は、嶺南大學に入學する前に、すでに文學研究會に入會していた。「南國詩人」と呼ばれるほどに有名であった彼は、『小説月報』、『文學週報』など文學研究會の機關誌に新詩を多く發表していた。こうして、雑誌の編集を経験し、また文學を志す同人が揃うことによつて、文學研究會廣州分會を誕生させる條件が整つたのである。

(3) 活躍期の創出（『文學』の創刊と『南大青年』の改版）

一九二三年七月七日、廣州の文壇を發展させようと念願した嶺南大學文科の教師と在學中の學生たちは、廣州における最初の新文學團體——文學研究會廣州分會——を發足させた。その後、廣東出身の文學研究會會員の叶啓芳を誘い、廣州分會の一員として加えた。さらに、宣傳の據點を擴大するため、一九二三年十月十日彼ら十人は北京と上海の『文學旬刊』を模倣し、新聞型の機關誌『文學』を創刊し、廣州『光報』

に付屬して出版した。創刊號に發表された「創刊的話」において、廣州分會の發起人たちは當時の廣州文壇の現状を顧みつつ、廣州分會を立ち上げる目的と機關誌を創刊する意圖を次のように語っている。

自西學東漸以來、我們南部底人士、多從事於物質或制度的改善。對於西來的文化——尤其是文學——雖誠懇的盡量接受，卻未曾活潑地積極提倡，新世紀的廣東底文學田地，竟可直捷捷說是「荊榛滿目」。就是少數好提倡文化文學的人，也多寄寓北省，不肯以南部做中心。（中略）我們開闢這所新的田園，就是一種奮興的表示。【西學東漸以來、我々南部の人士は、物質或いは制度の改善に努め取り組んできた。西洋から傳來した文化——特に文學——に對して可能な限り誠實に受け入れたが、活發にかつ積極的には提唱しなかつた。新世紀の廣東の文學の耕地は、率直に言つて「見渡すかぎり荒涼としている」状態にある。少數の文化や文學を提唱しようと志す人であつても、その多くは北部に居住しており、南部を中心にしようとは思わない。（中略）我々がこの新しい耕地を開墾したのは、一種の奮起の表明である。】

胎動期と準備期の活動狀況と全く異なつて、この時期に至つて、北京や上海と連係した廣州分會は、嶺南大學内の一文學サークルから變身し、文學研究會の一分會として全國の文學運動の舞臺に登場した。その結果、機關誌『文學』は次第に開かれた交流の空間となつた。具體的に言えば、二つの新しい展開が窺える。一つ目は、前稿において明らかにしたように、機關誌の様式、内容の編集、中央の文化事件に對する呼應等の面において、廣州分會が様々な形で文學の中心たる北京の本部及び上海分會と連動し、三つの地域に跨る空間を創出した點である。二つ目は、詩歌批評の實踐と文學批評理論の構築を重視した

ことである。當時の詩壇の發展狀況と外國現代詩の翻譯技法をめぐる本格的な詩學評論が『文學』に數多く掲載されることによつて、新詩に關する批評空間が開かれたのである。そして、理論の建設という側面からみると、その動向を顯著に表わすものとして、陳榮捷が發表した文藝批評家の小泉八雲に關する一連の紹介文章をあげることができる。陳榮捷が最初に試みたのは、一九二三年九月二十三日『南大青年』に掲載した小泉八雲の講演文の翻譯「最上乘的藝術」という文章である。その後、一九二四年一月『文學』の第十期に「小泉八雲」と題する長い論文を寄せ、「歷史上之小泉八雲」、「東方的解釋者—遠東歴史上的重要」、「他的文學天才和文學評論—遠東文學上的重要」、「小泉八雲的著作」という四つの部分に分けて、生涯から著書まで全面的に小泉八雲を論じた。また、一九二四年八月刊行の『南風』第二卷第四號においても前文を補充しながら、同名の「小泉八雲」を發表して紹介を續けた。劉岸偉氏の考證によれば、小泉八雲の全貌—彼の家系、アメリカでの生活、日本行き、結婚と歸化、書の特徴、英文學講義、文學批評—をはじめて中國の讀者に示したものは、朱光潛が一九二六年九月に『東方雜誌』(第二十三卷第十八號)に掲載した「小泉八雲」という文章である。しかし、新發見の『文學』に掲載された陳榮捷のこの論文は、一九二六年の朱光潛の文章より三年も早く、本格的に小泉八雲に言及したかなり早期の文章だったに違いない。

さらに、この時期において彼らが活發に寄稿したもう一つの雑誌は、嶺南大學青年會が一九一七年九月に創刊した學内廣報『嶺南青年』である。この資料もこれまで全く言及されることがなかった。一九二一年九月二十五日の『嶺南青年』は、「本報職員表」の欄で廣報の役員を公表し、論說記者として紹介されたのは、廣州分會の會員である陳

榮捷、甘乃光、司徒寬の三人である。一九二二年十月十六日から、三人はさらに論說主任に昇格した。一九二一年十月三〇日、『嶺南青年』は『南大青年』と改名した。廣報から週刊雜誌に變身するにつれ、この三人を始め、廣州分會の作家たちは『南大青年』にも新詩や散文などの作品を頻繁に寄稿するようになった。以下、この時期に刊行された『南風』第二卷第四號及び『南大青年』における廣州分會會員の作品細目を次の一覽表にまとめる。このように、廣州分會は、機關誌『文學』の創刊を皮切りに文筆活動をさらに『南風』と『南大青年』にひろげ、全般的に展開していった。

表二…活躍期における廣州分會會員の作品(機關誌「文學」以外)⁽²⁾

「南大青年」	「南風」第二卷第四號
一九二三年九月十六日	一九二四年八月刊行
・ 點點的菜花	・ 昨年以來之中國新詩壇
・ 苦水(詩)	・ 小泉八雲
九月二十三日	・ 六個骨壘子底白夢
・ 最上乘的藝術	・ 托爾斯泰的藝術論
(小泉八雲著)	・ 一夜的酒狂劉
・ 河邊的一條芦苇(詩)	・ 鑿花忽落
・ 點點的菜花	・ 唯實主義(續)
十月十三日	・ 感傷之夢
・ 念故鄉(詩)	・ 人海孤帆
・ 點點的菜花	・ 西沉
十一月十一日	・ 懺悔之夜
・ 歸途(散文詩)	・ 東風之畫
十一月二十五日	・ 讀書隨筆
・ 醉者之歌(詩)	(注…劉穆、木君は劉穆の筆名潘汎は潘啓芳の筆名である。)
十二月二日	
・ 一个受傷的行客(詩)	
甘乃光	劉燧元
	陳榮捷
	劉穆
	陳榮捷
	燧元
	潘啓芳
	湯澄波
	燧元
	潘汎
	陳榮捷
	梁宗岱
	劉燧元
	木君
	一葉

三、詩で結ばれた共同体

— 廣州分會詩作活動の諸相 —

胎動期における『西洋詩號』の實驗から出發し、準備期における新詩を中心に掲載するという方針の確立を経て、活躍時期に至って新詩創作と批評の爆發を迎えた。このような發展の軌跡を振り返れば、廣州分會は何よりも新詩の研究と創作を重視し、様々な詩に關する活動を展開したことがわかる。この特徴は、アメリカ方式の教育理念を實施した嶺南大學の成り立ちと深く關わっている。

一九二五年に出版された『嶺南大學年鑑』の「職員一覽表」⁽²⁾によれば、一九二四年度の外國語・外國語化と國文・中國文化に關する授業及び教員の配置は次のようである（傍線部は教員の氏名）。

陳輯五・國文、説文、白話詩、小説戯曲、文學／基來度・英文、

作文、文學、詩歌、徳文／格禮・英文、作文、文學／李勞士・英國

實業史／白士德、盧觀偉・宗教／美智貽・英文、歴史／

授業の擔當状況からみれば、英語と文學の教育が重視されており、特に外國詩歌や白話詩の教育に力を入れていた状況が窺われる。こういった外國詩壇動向に關する講義は、廣州分會の詩人たちを開眼させ、彼らの詩に對する熱情を培った。また、廣州分會は自らの機關誌『文學』を創刊することにより、獨自の「詩領土」を開拓することができ、地縁的・感情的な絆が深く結ばれ、新詩の發展を促す共同体を結成した。このような共同体での交流を介して、互いの友情の輪を育んだ。では次に、この特色について考察していく。

(1) 外國詩歌研究の新局面 — 『西洋詩號』の開拓性

外國現代詩の紹介と研究を中心とした『西洋詩號』は、廣州分會のすべての詩作活動の出發點であつた。中には陳受頤の「美國新詩述略」、陳榮捷の「詩之眞功用」と「詩翁雪利的研究」、甘乃光の「白浪寧研究」をはじめ、全部で十篇の論文とスペインの詩歌の翻譯などが收められている。嶺南地域において系統的に歐米現代詩を紹介するのは、この『西洋詩號』が最初である。換言すれば、廣州分會は結成の前から外國文學の研究が中國の新文學を發展させる道であるという理念をもち、早い段階から外國文學に關する研究を精力的に行つたのである。陳受頤は「美國新詩述略」において、中國文學の發展する方向を把握するためには、まず外國文學の研究が必要であると強調し、次のように述べている。

目下對於我國文學的第一級功夫還是「研究」兩個字。文學變遷是少不了的，究竟要如何變遷，是個未經解答的問題，要解答這難題，先要經過一番刻苦的研究，要用比較的方法，不得不留心外國文學。【目下我が國の文學にとつて最も重要なのはやはり「研究」の二文字である。文學の變遷は不可缺だが、一體どのように變遷するかははまだ解答されていない問題である。この難題に解答するには、まず苦勞して研究せねばならず、比較の方法を用い、外國文學に留意しなければならぬ。】

このような考えは文學研究會廣州分會が創刊もしくは主宰した雑誌に深く浸透している。

次に、詩人ブラウニング夫婦について書かれた甘乃光の「白浪寧研究」を一例として『西洋詩號』の内容を見てみよう。甘乃光は二十八頁を費やして、「白浪寧和丁尼孫的比較」、「他的生平略述」、「他的

生藝術觀、「他生平的傑作」戒指和一部書、「白浪寧夫人」という五つの部分に分けて、ブラウニング夫婦の生涯、藝術觀、代表作、そして同時代詩人との比較について本格的に論じた。形式にしても、論述にしても非常に優れており、特筆に値する。管見の限り、ブラウニングに關する本格的な翻譯と紹介は、バイロンなどの詩人と比べれば、かなり遅かつたのである。一九二五年以降は、新月社の詩人たち（徐志摩、聞一多、朱湘）による紹介が、代表的なものとして擧げられる。すなわち甘乃光の「白浪寧研究」は、近代中國において最初に全面的かつ本格的な紹介であつたと推測される。

しかし、『西洋詩號』は、當時著名な文藝雜誌が次々に出した特刊において、どのように位置づけられるのか。ここでは、一九二〇年代前半に刊行された外國文學の特刊を比較してみる。

特刊名	雜誌名	出版時期	編集者
・『西洋詩號』	『南風』	一九二〇・四	南風社
・『被損害文學專號』	『小説月報』	一九二一・十	文學研究會
・『世界民間故事專號』	『文學週報』	一九二三・一	文學研究會
・『雪萊記念號』	『創造季刊』	一九二三・九	創造社
・『太戈爾號』（上）	『小説月報』	一九二三・九	文學研究會
・『太戈爾號』（下）	『小説月報』	一九二三・十	文學研究會
・『拜倫專輯』	『小説月報』	一九二四・四	文學研究會

「特刊は、雜誌（機關誌）の特集號という形態を取ることもあるが（特に二〇年代の映畫の特刊）、多くの場合は單獨の刊行物として出版される」⁽²⁶⁾。こういった出版形式の視點から考えれば、一九二三年創造社が編集した「雪萊記念號」より三年も早く刊行された『西洋詩號』は、中國における歐米詩に關する特刊の先驅者であると言えよう。

一九二三年六月、二年餘りも停刊していた『南風』が復刊した際に、陳榮捷は「餘痛」を『南大青年』に寄せ、この『西洋詩號』が當時全國的にも高い評價を博した様子を次のように語っている。

南風自從出了西洋詩號之後，便得了全國文人的信仰，一躍而博著名文藝雜誌的聲價。（中略）北方作者，尤其是文學研究會諸君，還懇懇垂詢，燕京大學有的人想和我們合辦，貫通南北。事隔兩年，餘威是如此。【『南風』は西洋詩號を出して以來、全國の文人から信奉され、一躍、著名文藝雜誌の聲價を得た。（中略）北方の作者、とりわけ文學研究會の諸氏さえもわざわざ下問になり、燕京大學には私達と共同で經營し、南北を貫通しようとする人がいた。それより二年を経るが、依然として餘勢を保っている。】

このような好評からみれば、『西洋詩號』は中國における西洋詩の受容史において、見逃すことができない特刊であると言える。

(2) 「小詩ブーム」のもう一つの舞臺

一九二〇年代の初頭、口語體による自由詩が誕生してまもなく、中國詩壇には一種の簡潔で清新な言葉と、自由詩でありながら五行以内で収まる「小詩」と呼ばれる短い詩の創作が盛んとなった。それによつて、一九二一年から約四年間、一時的に「小詩ブーム」が訪れた。文學評論家胡懷琛は一九二四年に出版した『小詩研究』において、小詩を「二、三行の短い詩である。長くても五行に過ぎず、短いものは一行しかない、短詩とも呼ぶ」と定義づける。また、小詩の流行の根となつた三つの源流が、第一に周作人の日本短歌や俳句の紹介、第二にタゴールの哲理小詩の流行、第三に古典詩歌の影響であると述べている。⁽²⁷⁾ 小詩は、日本の短歌の影響を受けて始めて産まれたものである。

と胡懷琛に指摘されるように、三つの源流の中で、日本の影響は一番重要であった。

こういつた「小詩ブーム」は、文學研究會廣州分會の作家たちの新詩創作にも影響を及ぼした。彼らが機關誌『文學』、『南風』、『南大青年』に發表した詩作は、詩の長さからみると、十數行の散文詩もあるものの、六行以内に収まった作品が壓倒的に多い。特に梁宗岱の詩は、短い形式の中に純粹な感覺的格調をもつたものが多く、象徴派の立場に近い。彼は「小詩ブーム」の代表的詩人の一人として數えられると言つても過言ではない。例えば、「新生」は三行で一連の俳句のような形式で綴つており、「絮語」は一行から六行までの詩を五十首連ねた小詩群である。また、『南風』第二卷第三號に掲載されている「涙歌」は、四行の小詩十二首で編まれた連作である。従つて、嶺南大學時期の梁宗岱の詩の形式面での特徴を言えば、「小詩」形式へのこだわりが典型的である。「絮語」より一つの作品を擧げてみよう。

【絮語 三八】憂慮像毛蟲一般／把生命的叶一片片的蠶吃了。
【憂慮が毛蟲のように／命の葉を一片一片蠶食した。】

この小詩のなかで敘事性は徹底的に排除され、もっぱらイメージの斷片もしくは一瞬の心象風景を描いている。また、比喩の發想が特異で、詩趣に富んでいる。周作人は「論小詩」(『覺悟』一九二二年六月二十九日)において、小詩の基準を、「小詩的第一條件は須表現實感、便是將切迫地感到的對於平凡的事物之特殊的感興、迸躍地傾吐出來(小詩の第一條件は實感を表すこと。すなわち、平凡なものごとに特別な感興を切實に感じた時、それをほとばしるように吐露する)」というように述べている。ところが、梁宗岱は小詩を數多く發表したものの、何を參考にして書いたかについては言及していない。廣州にいる梁宗岱は、同じく

文學研究會會員である周作人が發表した「日本の詩歌」(『小説月報』第十二卷第五號、一九二一年)や、「日本の小詩」(『詩』第一卷第五號、一九二二年)や、「論小詩」など一連の紹介文を實際に目にしてきた可能性が高い。しかし、日本文學の紹介がまだ少なかつた當時、それだけでは、日本の小詩つまり俳句や短歌について深い理解を得ることは考えにくい。そこで、日本詩人である草野心平の新詩も『文學』に掲載されたことは非常に興味深い。

昭和の代表詩人である草野心平(一九〇三—一九八八)は、一九二一年一月、中國廣州に渡り、同年九月嶺南大學に入學し、唯一の日本人留學生として學び始めた。留學時期に文學研究會の活動に参加したことについて、草野心平自身が「二〇年代の私たちが『文學』というリフレットを出していたが、そのグループは十二、三人だつた。梁宗岱も劉燧元も私もそのメンバー」であつたことを語つている。筆者が新たに發見した廣州分會の機關誌『文學』には、草野心平が當時投稿した三つの詩作も認められる。

第一首…「草際」 (第一期、一九二三年十月)
第二首…「小書齋兼寢室的悲劇」 (第六期、一九三三年十一月)
第三首…「微風」 (第十期、一九二四年一月)

これらの作品は、草野心平自身が述べるように「自分たちの仲間のうちには詩を書くものが三人ゐた。宗岱と劉燧元と自分と(中略)燧元と宗岱はグループのなかでも特に自分に懐かしい。その頃夢中で詩を書きなぐつてゐたので宗岱は自分に機關銃といふ綽名をつけてしまつたのだつたが、その頃の自分の作品はいま手元には一つも残つていない」⁽²⁸⁾ため、『草野心平全集』に収録されず、歴史に埋もれてしまつた。また、彼の回想によれば、當時嶺南大學の詩人たちの中で、彼と詩を

めぐる交流が一番深かった人物は、學友の梁宗岱と劉燧元であつた。廣州分會の詩人たちの「小詩」の創作にとつて、周作人を介してというよりむしろ、草野心平との直接交流を介して日本小詩を受容したといふべきとだろう。言い換えれば、草野心平は航路誘導の役割を果たしたと考えられる。草野心平が『文學』に投稿した作品の紹介と解釋、また二〇年代中國の詩壇背景との關係、そして文學研究會廣州分會詩人たちの「小詩ブーム」を結ぶ接点については、日中文學交流史における重要な課題の一つとして別稿で詳細に考察したい。

(3) 廣州分會における「象徴主義詩學」の萌芽

廣州分會の代表作家である梁宗岱は、一九三〇年代にフランスから歸國してから、文藝理論に力を注いだ。フランスの象徴主義を紹介した論文「象徴主義」や詩論集『詩與眞』が有名である。實は、二〇年代の廣州分會において、象徴主義に關する理論的な討論や創作の實踐は、すでに芽生えていた。

甘乃光は、『文學』第九期（一九三三年十二月）に論文「詩里的象徴主義」を發表し、「象徴主義とは表記を用いてある思想または境地を代表するという意味である」と定義付ける。彼は「在偏於情感的文學——尤其是詩，最忌坦蕩蕩平鋪直敘（感情に偏る文學——特に詩において、平板でありのままに敘することを最も忌避すべき）」と強調し、それを解決する方法として「暗示的方法」を提唱している。具體的に言えば、象徴主義の三つの方法——暗喩（Metaphor）、寓喩（Allegory）、寓話（Fable）を紹介する上で、象徴主義とロマン主義、寫實主義との關係を次のように整理している。

象徴主義在歐洲本來是寫實主義的反向，傳於十九世紀末葉的頹廢

派（Les Decadents）或象徴派的作家。開山祖爲Nerval，而主張廣布的則有 Mallarme 和 Verlaine。（中略）作者實覺的象徴主義在詩裏應有相當的重要地位。象徴主義乃新浪漫主義的支流，不是爲人生的藝術的工具【象徴主義はヨーロッパにおいては本來寫實主義とは逆方向であり、十九世紀末葉の頹廢派或いは象徴派の作家の間に傳わつていた。開山の祖はネルヴァルであるが、廣く傳えることを主張する人にはマラルメとヴェルレーヌがいる。（中略）作者の直覺による象徴主義は詩の中において相當重要な地位を持たなければならぬ。象徴主義は新浪漫主義の支流であり、人生の爲の藝術の道具ではない。】

一九二〇年代における象徴主義の受容状況を概観してみれば、吳曉東氏が指摘するように、象徴主義は「表象主義」という譯名で中國文壇に登場したのであつた^⑩。その後の數年間の中で複数の新聞と雑誌は、象徴主義思潮と象徴派作家に關する評論を續々と世に送り出した。この象徴主義の翻譯・紹介のブームの裏に隠されたのは、認識上の混亂である。それは具體的に言えば、「表象主義」、「新浪漫主義」、「象徴主義」の概念が統一していないことに表れている。このような背景を考えると、甘乃光のこの象徴主義に關する論文は、一九二〇年代において非常に論理的なものと思われる。

四、地域性から見た廣州分會の獨自性

— 結びにかえて —

近代化の據点であり革命の發祥地である廣州は、アヘン戦争後に初めて設置された通商港の一つとして、北京、上海と共に最も早い時期から西洋文化の影響を受け、獨りな近代化を歩んできた。このような

歴史が、嶺南大學の教育理念、學内文化などにも影響を及ぼしたことは言うまでもない。以下、嶺南大學ひいては嶺南地域の場所柄を考えつつ、廣州分會の性格について検討を加えたい。

(一) 宗教の色彩—ミッション系大學文學團體の基底

嶺南大學の創設とその源流は、アメリカの基督教海外宣教組織である American Presbyterian Board of Foreign Mission と大いに關係している。一八八四年廣州で活動していた宣教師の Rev. B.C. Henry D.D. は、アメリカに短期歸國する際に廣州にミッション系學校を創設するという考えをその海外宣教會に提言した。翌年、同じく宣教師の Rev. A.P. Happer D.D. は同會に同じ提案を行った。その要求に應じ、一八八六年より海外宣教會は募金活動を行い、動き始めた。一八八八年、Happer は總計八萬二千ドルの募金で廣州に Christian College in China と名づけ、「格致書院」と呼ばれる學校を創立した。一九〇二年、廣州郊外の康樂という場所に移轉し、翌年より Canton Christian College と改名した。嶺南大學の緣起や資金の來源がアメリカの基督教會と極めて深い繋がりを持つていたことは言うまでもない。その絆は英語による校名にも反映されている。

一部残存の嶺南大學の課程設置に關する資料を見てみると、一九〇六年度から一九〇八年度の大學預科の授業表によれば、一年と二年生向けの「聖書講義」、三年生向けの「福音講義」、四年生向けの「舊約講義」が毎週二時間ほど實施された。また、一九一七年から文理科大學では「宗教講義」が必修科目として規定され、全員の履修を學生に義務付けた。²⁶⁾ こうした教育背景と環境のもとに産まれた文學研究會廣州分會は、誕生前からその文學活動にも濃厚な宗教的色彩が浸

み込んでいる。廣州分會の出発点となった『南風』創刊號の「本誌宣言」において、「我們願將基督教的精神、眞義和文明、隨時介紹（我々はキリスト教の精神、眞義と文明を隨時紹介したい）」という理念が明記されている。その實踐として掲載された陳受頤の「歐戰後宗教的覺悟」や陳榮捷の「宗教解放」などの文章から、『南風』の宗教精神を重視する創刊の趣旨が窺える。

廣州分會會員の叶啓芳は、廣州培英中學を卒業後、ミッション系の協和神學院に入學した。一九二二年春、彼は學校の學生代表として、北京で開かれた第十一回世界基督教學生同盟代表大會に参加したこともあつた。宗教と文學に興味を持つ彼らは、宗教文學の紹介に積極的に取り組んでいた。例えば、叶啓芳と湯澄波がはじめて文學研究會の機關誌である『小説月報』に發表した文章は、二人が共譯した「聖經之文學的研究」（英・Prof. W. H. Hudson 著）であつた。翌年の一九二三年五月、叶啓芳は愛、自由、現世主義等の視點から基督教の基本思想を論じた「現在基督教思想概略」を、強い影響力のある『東方雜誌』（第二〇卷第九號）に寄せ、當時起きた「非基督教思潮」を批判した。²⁷⁾

また、文學研究會廣州分會を打ち立てた中心人物である梁宗岱は、嶺南大學に入學する前にも廣州のミッションスクールである培正中學校に在籍している。嶺南大學在學中の一九二四年、彼は處女詩集『晚禱』を上梓して注目を浴びる。夜にイエスに祈りを捧げることはそもそも基督教の一種の儀式である。こういう意味を含んだ言葉を詩集の題名にすること自體、非常に興味深い。『小説月報』十六卷十九號に掲載された『晚禱』の廣告では梁宗岱の詩について、「梁君の詩は獨特の風格があり別の作家とは明らかに異なつたところがある」と書か

れている。「獨特な風格」を持った他の詩人とは違うものであると評價した主な原因の一つは、恐らくその詩に頻繁に登場する基督教の場面と現出する神聖なる雰囲気である。梁宗岱の代表作の一つとして、文學研究會會刊の『星海』（一九二四年八月、商務印書館）に選ばれた「太空五」より一節を例としてみよう（傍線は引用者による）。

像老尼一般、黄昏／又從着古的修道院／黯淡地遲遲地行近了／
艷裝的晚霞／依然閃着他最後的金光；／
錦衾的晚霞／也一樣汎着他臨睡醉容。／

聽——聽！／熙合的百鳥／又奏起雄渾的凱旋曲來了……

【老尼の如く、黄昏が／また古びた修道院から／

薄暗くゆつくりと近づいてきた／艷やかに装った夕日は／

依然としてその最後の金色の光を輝かせている；／

錦の蒲團を着た夕焼けも／

同様に眠りにつく前の醉態を浮かべている。／

聽け——聽け！／にぎやかに群れた數多くの鳥たちが／

再び雄渾な凱旋曲を奏で始めた……】

傍線部が示しているように、梁宗岱は詩の中で基督教の風景とイメージに關連する表現を巧妙に織り込んでゐる。また、黄昏、夕日と夕焼けを人格化し、古ぼけた修道院という清淨な環境を描きながら、「艷裝」、「金光」、「雄渾」などの言葉を使うことによつて、逆に一層神聖かつ壮大な宗教的境地を呈している。このような傾向は『星海』に載せられた劉燧元の「夜懺」という長詩にも見られる。「夜懺」は、全詩の大半がイエスに懺悔する言葉から構成され、その題名も梁宗岱の『晚禱』と類似した意味を表している。

西學東漸以來、西洋の文學から大きな影響を受けて成立した中國近

現代文學と基督教文化との關係は、文學史における重要な課題である。清朝に始まったプロテスタントの傳道は、十九世紀初頭以來華した宣教師による聖書の翻譯や教會學校の建設などの活動によつて發展し、基督教の土着化も漸進的に進められた。特に、五四新文化運動時期において魯迅や陳獨秀や周作人などの知識人は、思想革命の一環として基督教の自由平等、人道主義、博愛の思想とその文化を推賞した。多くの先行研究が指摘するように、基督教文化は中國現代文學に大きな影響を及ぼした。魯迅、周作人、郭沫若、巴金、許地山、冰心、曹禺、王統照、老舍等々、個人的に基督教の文化を受容した現代作家の名前は數え切れない。しかし、文學研究會廣州分會のように、基督教精神と文化の紹介を團體活動の宗旨の一つとして眞剣に行い、徹底的に貫いた文學團體は、中國現代文學において極めて特別な存在であると言えよう。

(二) 集團的な「轉向」

文學研究會の誕生を象徴する「宣言」と「簡章」では、鮮明な文學理念や流派上の旗印といったものは掲げず、代わりに作家間の聯合のための勞働組合のような組織を設けたいと聲明した。組織が比較的嚴密である創造社と比べれば、文學研究會は創立當初から、開放的な姿勢を見せている。このような背景の下で、廣州分會の北京や上海との組織的な繋がりはさほど強いとは言えない。「本部―分會」のような組織關係が實際に機能したのは初期の短い期間に限られる。その後、自らの機關誌を創刊することで、廣州分會はさらに別様の文學の世界を呈した。その獨自性が垣間見られるのは、廣州分會作家たちの二〇年代半ばからの集團的な「轉向」である。劉燧元はかつて自分の文學

「經歷をこのように語ったことがある。

从二十年代末期到三十年代初年，我過去寵愛的李義山詩集、納蘭容若詞等等都已束諸高閣，西洋文學也丟在一旁，舊詩也好，新詩也好，此調都擱下不彈。取而代之的是政治宣傳，政治鬭爭和進步的社會科學。【二〇年代の末から三〇年代の初頭にかけて、私がかつて愛していた李義山の詩集、納蘭容若詞等はすでに皆封印して高閣にしまい込み、西洋文學もすっかり傍に放り出してしまった。舊詩であれ、新詩であれ、これらのものは全て放棄してしまったのである。その代わりとなつたのは政治宣傳、政治鬭爭と進歩的な社會科學であつた。】

嶺南大學卒業後の劉燧元は、「反帝國主義同盟」や「第三インターナショナル」の組織に参加するなど左翼活動家として活躍していた。⁽³⁷⁾ 實は、劉燧元にとどまらず、二〇年代半ばから三〇年代にかけての廣州分會においてもこのような傾向は顯著であつた。陳受頤は一九二五年アメリカのシカゴ大學へ留學し、一九二九年歸國後、嶺南大學の教授、北京大學歴史學科の主任などを歴任した。陳榮捷は、一九二四年アメリカのハーバード大學へ留學し、一九二九年から一九三六年まで、嶺南大學文科の教務長を務めた後、一九三七年から一九四二年までは、ハワイ大學哲學系の教授になった。梁宗岱は、一九二四年秋、スイスのジュネーブ大學、二五年、パリ大學に留學し、後に西南聯合大學や廣東外語外貿大學で教鞭を執つた。一方、學者の道ではなく、政治家やジャーナリストとして生きた人も少なくない。例えば、甘乃光是、一九二四年六月から黃埔軍官學校教官、國民黨中央執行委員を務めた。後アメリカに留學、歸國後は一貫して國民黨とその政府の要職を歴任した。湯澄波は、一九二三年嶺南大學卒業後、嶺南大學助教、黃埔中

央軍官學校教官などを歴任した。⁽³⁸⁾

このように、北京と上海の文學研究會の作家が選擇した文學的な生涯と全く異なり、廣州分會の作家たちは後にほぼ全員が「文學救國」の道を放棄し、社會科學の重視と強烈な興味へ「轉向」し、政治家もしくは學者の道を選んだ。その原因について、劉燧元は次のように説明している。

無情的政治現實把我從這種自我麻醉的境界拉回去。在接踵而來的五卅運動、省港大罷工、六二三沙基慘案，尤其是第一次國內革命戰爭的震撼之下，腐朽、變形的象牙塔經不起暴風急雨的沖擊，塌個粉碎了。我們的新文藝小團體連同它的刊物，象曇花一現般消失了。【無情な政治の現實が私をこの自己麻醉の世界から引きずり戻したのだ。續けて起こつた五・三〇事件、省港大ストライキ、六・二三沙基殘虐事件等、特に第一次國內革命戰爭の激震の中で、朽ち果て、歪んでいた象牙の塔は嵐のような衝撃に耐えることはできず、粉々に崩れ落ちてしまった。私たちの新文藝小團體及びその刊物はまるで短命なウツングの花のようにはかなく消えてしまった。】

廣州分會の作家たちが在學中の一九二四年には、廣州において軍閥割據の中國を統一するための國共合作が成立し、黃埔軍官學校が設立されて、蔣介石が校長となり、周恩來が政治部主任を務めた。その後、毛澤東の農民運動講習會や國共分裂等も廣州で發生したことに見られるように、政治が激しく動いていた。こうした革命の渦の中、彼等は廣州において革命の嵐を経験しつつ、時代の雰囲気と地域性には、廣州分會會員である。廣州という地固有の革命的傳統と地域性には、廣州分會會員の集團的な「轉向」を理解する上で重要な鍵が込められている。

以上見てきたように、廣州分會は嶺南現代文學史における初代の作家グループを育成した。その結果、北京本部と上海・廣州分會が鼎立するような局面が形成された。こうして、廣州分會は、外國の作家作品に注目し、象徴主義の紹介、小説の翻譯、『西洋詩號』の刊行などを通して、新たな文學的局面を開拓し、それ以後の文學の發展に堅固な基礎を築いたのである。しかし、廣州分會の會員は後に殆ど政治や社會學の研究に轉向したため、二十年代における彼らの文學活動は次第に歴史に埋もれてしまったのである。

注

- (1) 九〇年代以來、中國では嶺南地域におけるアヘン戰爭から五・四運動までのいわゆる嶺南近代文學（例えば、黃遵憲、梁啓超、蘇曼殊等）に關する研究も多くの成果が積み重ねられてきた。本稿では、嶺南近代文學の研究領域との混同を防ぐため、中國における時代區分を使用する。
- (2) 例えば、從來の學科設置に使われた「近代（清末民初）」、「現代（五四から建國まで）」、「當代（建國以降）」の枠組みを打破し、二十世紀文學の一貫性を重視することや、また、政治的な原因で文學史の研究對象から除外された作家たちを再評價することなどが挙げられる。北京大學を中心とする文學史研究者を糾合した嚴家炎主編『二十世紀中國文學史（全三冊）』（二〇一〇年、高等教育出版社）はその代表的な成果である。秋吉收『社會史的視點』から語る新時代の中國文學史（『東方』第三七三號、二〇一二年三月）に詳しい。
- (3) 例えば、八〇年代末期から盛んになった「京派・海派文學」研究ブームが挙げられる。
- (4) 張振金『嶺南現代文學史』（廣東高等教育出版社、一九八九年）、一、二頁。
- (5) 張振金『嶺南現代文學史』（前掲注四）、一三、一四頁。
- (6) 拙稿「文學研究會『廣州分會』の實像―機關誌『文學』の發見をめぐる」、『中國學の新局面』（日本中國學會第一回若手シンポジウム論文集、二〇一二年二月）。
- (7) 李瑞明編『嶺南大學文獻目錄―廣州嶺南大學歷史檔案資料』（嶺南大學文學翻譯研究中心、二〇〇〇年）、二二頁。
- (8) 「中國近・現代文學史概説」（丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中國現代文學事典』、東京堂出版、一九八五年）、一四頁。
- (9) 一八二七年創刊の『廣州記錄報』、一八三二年創刊の『廣州雜誌』、一八三二年創刊の『中國叢報』、一八三五年創刊の『廣州報』など英文の新聞が廣州で出版された。「清末至中華人民共和國成立前夕的報業」（『廣州市誌』、廣州出版社、一九九九年）、八六四頁。
- (10) 張振金『嶺南現代文學史』（前掲注四）、一二頁。
- (11) 「大學生會本屆職員」（『嶺南青年』、一九二二年十月十六日）。
- (12) 原文は以下の通り。「在短篇小說中，他可稱為驚奇派的首領。他的小說裏驚奇出人意料地收束，真能令讀他小說的喜歡（中略）他還有一個特長，就是他能够使用許多社會通用地俗語（Slang）入了小說（中略）他又識得社會各色人等，將他們盡地形容出來，使我們知道社會的實在情形」。
- (13) 樽本照雄編、賀偉譯『新編增補清末民初小說目錄』（齊魯書社、二〇〇二年三月）、四八〇頁。
- (14) 一九二五年に集中的に掲載されたものとしては黎錦明の譯「一個參將的故事」（『文學旬刊』、第七十三期）、「猜問」（『文學旬刊』、第七十八期）、「躊躇」（『文學旬刊』、第七十九期）が挙げられる。
- (15) 陳受頤「本誌種種啓事」（『南風』二卷三號、一九二三年六月）。
- (16) 『南風』第二卷三號、一九二三年六月。
- (17) 陳榮捷「詩之眞功用」（『南風』一卷四號、一九二〇年十二月）。

- (18) 拙稿「文學研究會『廣州分會』の實像―機關誌『文學』の發見をめぐって」(前掲注六)、二六一―二六三頁を参照されたい。
- (19) 劉燧元の「昨年以來之中國新詩壇」(『南風』二卷四號)、湯澄波の「詩的實驗―中國新詩現在所應取的進程」(『文學』第二期)、梁宗岱の「評李加雪君的『浪漫主義的特殊色彩』中吉慈詩的譯文」、「再評李加雪君吉慈詩譯文」(『文學』第五、七期)に代表される。
- (20) 劉岸偉「中國における小泉八雲」(平川祐弘監修『小泉八雲事典』恆文社、二〇〇〇年)、三七八頁。
- (21) 『文學』に發表した作品の細目は拙稿「文學研究會『廣州分會』の實像―機關誌『文學』の發見をめぐって」(前掲注六)、二五八―二六〇頁を参照されたい。
- (22) 『嶺南大學年鑑(一九二四年度)』(一九二五年出版)は、中山大學圖書館校史展示資料室に收藏される資料である。
- (23) 陳受頤「美國新詩述略」(『南風』第一卷四號、一九二〇年十二月)。
- (24) 朱湘「白朗寧的『異域相思』與英詩」(『京報副刊』一九二五年七月五―一〇五期)、聞一多「白朗寧夫人的情詩」(二)(『新月』一九二八年第一期)、徐志摩「白朗寧夫人的情詩」(二)(『新月』一九二八年第一期)。
- (25) 松浦恆雄「中國現代都市演劇における特刊の役割」(『野草』第八十五號、二〇一〇年)、一七頁。
- (26) 胡懷琛『小詩研究』(商務印書館、一九二四年六月)五―七章を参照。
- (27) 草野心平「梁宗岱のこと」(『草野心平全集・第八卷』(筑摩書房、一九八二年)、一〇三頁)。
- (28) 詳しい説明は拙稿「詩人草野心平の誕生と中國―文學研究會廣州分會との關わりをめぐって」(『野草』第九〇號、二〇一二年八月)を参照されたい。
- (29) 同注二七。
- (30) 吳曉東「象徵主義在中國の傳播(一九一九―一九二七)」(『象徵主義與中國現代文學』安徽教育出版社、二〇〇〇年)、六二頁。
- (31) 李瑞明編『嶺南大學文獻目錄―廣州嶺南大學歷史檔案資料』(前掲注七)、一九頁。
- (32) 李瑞明編『嶺南大學』(嶺南大學籌募發展委員會、一九九七年)、一四九―一五一頁。
- (33) 一九二二年三月から四月にかけて、中國には「西教」に對する議論が運動という形をともなつて勃發した。いわゆる反基督教運動である。石川禎浩「一九二〇年代中國における『信仰』のゆくえ―一九二二年の反キリスト教運動の意味するもの」(『一九二〇年代の中國』汲古書院、一九九五年九月)に詳しい。
- (34) 原文は以下の通り。「年來我國非宗教聲浪盛行一時、他的焦點都集中于基都教(中略)倘若用適當充分的時間把當時非宗教和非基督教的論調搜集起來、逐一詳察和評價、我們可以發現其中有很多可笑之點更可以大膽說其中很少是能深知宗教之內容和近代基督教思想的」。
- (35) 楊劍龍『野的呼聲―中國現代作家與基督教文化』(上海教育出版社、一九九八年)、王本朝『二〇世紀中國文學與基督教文化』(安徽教育出版社、二〇〇〇年)、劉勇『中國現代文學作家的宗教文化情結』(北京師範大學出版社、二〇〇三年)はその代表的な成果である。
- (36) 劉思慕『野菊集』後記(上海文藝出版社、一九八四年)、二四二頁。
- (37) 鄭仁佳「民國人物小傳・劉思慕」(『傳記文學』一九九二年第六〇卷第六期)一四三頁。
- (38) 『最新支那要人傳』(朝日新聞社、一九四一年)甘乃光(三八頁)、湯澄波(二六七頁)の紹介文を参照。
- (39) 同注三六。